

魂
手
形

装画・本文挿絵
ブックデザイン
三好愛
アルビレオ

目次

序

〇〇四

第一話 火焰太鼓

〇〇七

第二話 一途の念

〇九七

第三話 魂手形

一五九

序

江戸は神田三島町にある袋物屋の三島屋は、風変わりな百物語をしていることで知られている。人びとが一夜一間に集って順繰りに怪談を披露するのではなく、語り手一人に聞き手も一人、一度にひとつの話を語ってもらって聞きとって、その話はけっして外には漏らさず、

「語って語り捨て、聞いて聞き捨て」

これが三島屋の変わり百物語の趣向である。

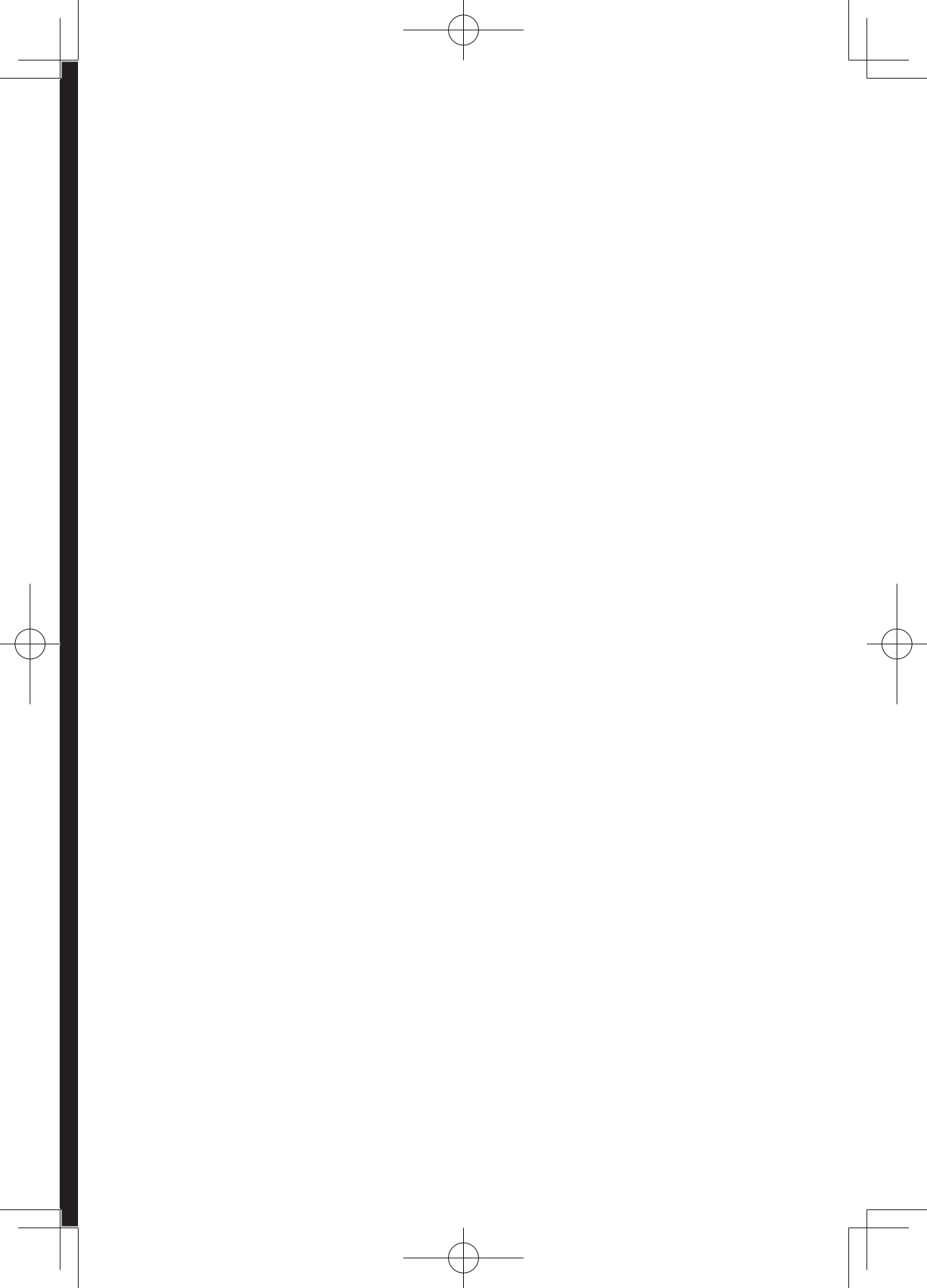
三年余り前、彼岸花の咲く季節に、主人・伊兵衛が招いた来客の身の上語りが振り出しとなったこの変わり百物語は、最初の聞き手を務めた姪のおちかが近所の貸本屋へ嫁いだあと、次男坊の富次郎が引き継いでいる。いささかの遊び心と絵心がある富次郎は、語り手の話を聞き終えると、それをもとに墨絵を描き、〈あやかし草紙〉と名付けた桐の箱に封じ込めて、聞き捨てとす

る。若いうちは買ってもするべき苦勞をしにいった奉公先で思いがけず大怪我を負い、生家へ帰

ってきて、療養がてらのふらふら暮らし。変わり百物語の聞き手としても新米の富次郎には、怪談語りが呼び込む怪異から三島屋を守る禍祓^{まがはら}いの力を持つお勝^{かつ}、富次郎を子供のころから世話してきた古参のおしま、この二人の女中が強い味方だ。

人は語りたがる。嘘^{うそ}も真実^{まこと}も、善きことも悪しきことも。

気さくで気が良く、旨いものが大好きで、今の気楽な身の上に、自ら「小旦那^{こだんな}」と称して剽^{ひょう}げてみせる富次郎。しかし、変わり百物語に臨むときはいつも真剣勝負だ。そんな聞き手の待つ三島屋に、今日もまた一人、新たな語り手が訪れる。



火焰太鼓

第一話





水無月の朔日、鐵砲洲稲荷へ富士参りに行く母・お民のお供をした富次郎は、本物の靈峰富士の溶岩を使ってこしらえたという高さ十一間（約二十メートル）もあるお参り用の富士山のそばで、懐かしい「師匠」とばったり会った。花山蟬螂という絵師である。

背が高く手足が長く、痩せぎすで顎がとんがっており、ちよつと飛び出し気味の目玉ばかりがぎよろりとしている。そんな見てくれが雅号の由来だというこのかまきり絵師は、人柄は優しくて教え上手だった。

富次郎は十五の歳に、「他所の釜の飯を食って来い」という父・伊兵衛の言いつけに従って、新橋尾張町の木綿問屋〈恵比寿屋〉に住み込みの奉公に出た。先様では富次郎を三島屋からの預かりものとして丁寧に遇し、木綿問屋の商いを一から教えてくれたのだが、それに加えてもう一つ、富次郎に学びの機会を与えてくれた。それが絵を描くことである。

恵比寿屋の主人は、外に女をつくって子を産ませ、その子をお店に入れて奉公人として追い使うという酷い一面のある人だったけれど、気の多い趣味人でもあった。諷きに三味線、鼓などの芸事はもちろん、朝顔を育ててみたり、メジロを飼ってみたりといろいろやっていたが、そのな

かの一つに絵を描くことがあり、その師匠が花山蟬螂だったのだ。

蟬螂師匠はしばしば恵比寿屋に通ってきて、奥の一間で絵描きのいろはを主人に教えた。当時の富次郎は奉公を始めて半年足らずで番頭格になり、何かと主人のそばについていることが多かったのだ、自然と蟬螂師匠とも顔馴染みになった。あるとき、実は自分も子供のころから絵が好きなのだが、きちんと習ったことはないと話してみると、師匠の方から恵比寿屋に掛け合っていて、富次郎も主人と一緒に習えることになった。

絵師がそんな計らいをしてくれたのは（もちろん富次郎がただの奉公人ではないことを知った上ではあるが）、恵比寿屋の主人がむら気な上、素人のくせに絵の鑑識眼があることを吹聴するので、教えがいがなくってつまらなかったからだ、あとで本人がこっそり教えてくれた。

富次郎の絵心は生まれついてのものらしく、最初から筋がよかった。振り売りから三島屋を興した伊兵衛にもお民にも、美しいものを見る目はあるわけだから、その血筋の力なのかもしれない。

恵比寿屋の主人が次の習い事に気を移すまで、二年ほどのあいだ、蟬螂師匠は熱心に教えてくれたし、富次郎はよき弟子であった。そのように親しくなってからわかったのだが、蟬螂も小さな商家の生まれだった。どうしても絵を描きたくて、十二のときに家を飛び出し、小石川の御家人で絵師でもあった花山松治郎（雅号は美松）に弟子入りして、下働きしながら絵を習ったのだそうだから、富次郎に少し似たものを感じてくれたのだろう。

当時は三十代半ば、今は四十路を越した花山蟬螂は、富士参りの場で再会してみれば、鬢に白

いものがちらちらとまじり、洒落た刺繻の花紋付きの黒羽織をさらりと着こなしていた。

二人で再会を喜び合った。絵師は富次郎が恵比寿屋から三島屋へ帰ったことを知っており、今も絵を描いているかと問うてくれた。

「ほんの手慰みでございますが」

変わり百物語の聞き捨てのためだとは言えず、そう答えた富次郎に、花山蟬螂は連れの男を紹介してくれた。日本橋通町 四丁目にある筆墨硯問屋「勝文堂」の手代頭で、名前は活一。歳は蟬螂と富次郎のあいだくらいだろう。空豆に目鼻をつけたような顔で、にこにこ愛想がいい。

「私は筆や墨ばかりか、画材はみんな活一さんに頼っているんですよ。この人だけの伝手を持っていて、いいものを安く仕入れてくれるから、ぜひ便利にお使いなさい」

活一も「どうぞよろしくごひいきに願います」と言ってくれたので、富次郎も「こちらこそ」と愛想を返しておいた。

帰り道、厄除けの麦わら蛇をぶらぶらさせながら、お民に絵師との縁を話して聞か



せると、この働き者のおっかさんは素朴に驚いた。

「あんたはそんなに絵が好きだったのかえ」

「いえ、下手の横好きですよ。蠅螂さんのあとは、これという師匠についたわけじゃありませんし」

「近ごろも、ときどきうんうん唸りながら何か描いておいでだよね」

「はあ」

「道具や画材はどうしておいでなんだ。お愛想じゃなく、さっきの勝文堂さんにいろいろ頼んだらいいんじゃないの」

「本物の絵師が使う画材なんぞ、わたしにはもったいないですよ、おっかさん」

花山蠅螂はかつてもある絵師ではなかったし、今もそうなのだろう。だが、好きな絵を描いて、そこそこ良い暮らしをしているように見えた。富次郎とは居場所が違う。

ところが、それから数日後、

「近くまで届け物に参りましたので、ご挨拶あいさつだけでも思いました」

と、活一が三島屋を訪れた。

富次郎は慌ててしまった。出商いの商人には縁先で会えば充分なのだが、客間に通して丁重にしたのは、やっぱり元師匠の顔を思い浮かべたからである。

富次郎は正直に、今の自分の「手慰み」は本当にそこらの半紙に墨絵を描くことで、子供が板塀にいたずら書きをするのと大差ないと話した。活一は嫌味のない商売人で、富次郎の汗顔をや

わからく受け流した。

「お騒がせしてあいすみません。ただ、富士参りでお目にかかったあと、蟬螂師匠がたいそう嬉しそうに富次郎さんの話をなさいましてな」

——私が教えたときにはまだ小僧の面影が残っているような年頃だったが、あの人には独特の才があった。これまで出会った弟子のなかでは、いちばん光るものがあつた。

——今も描いているなら幸いだと思つたが、三島屋さんほどのお店の倅が、それを放り出して絵の道に進めるわけもあるまい。つくづく惜しい。きちんとした師匠について腕を磨けば、花を咲かせる才だと思ふのに。

これを聞いて、富次郎は耳が熱くなつた。花山蟬螂が本当にそこまで言ってくれたかどうかは怪しい。活一が話を盛つて、勝文堂の商売に繋がればいいと恃んでいると踏んだ方が正しかろう。それでも嬉しかった。自分には光るものがあつたのか。二年ばかりの師匠と弟子でも、今も覚えていてもらえるほどに。

活一が引き揚げていったあと、しばらく客間でぼうっとしていた。

今の富次郎が描く絵は、変わり百物語の聞き手としてのものである。もとより永くとおくものではなく、〈あやかし草紙〉の桐箱のなかで、自然に古びて薄れて消えてしまうことをこそ望んで描いている。

——そうじゃなくて、ホントに本物の絵を描いてみたらどうなるだろう。

それ以前に、描けるだろうか、自分に。